

エッセイ ヤドリバエと私

一般社団法人全国植物検疫協会

古茶 武男 (こちゃ たけお)

ヤドリバエは、クロバエやニクバエに近縁で、主にチョウやガの幼虫に内部寄生する。多くの農業害虫に寄生するので益虫ということになろうが、蚕に寄生する種が数種知られており、養蚕が盛んであったころには大害虫の面もあった。世界から8,000種以上が、日本からは400種類以上が記録されているのでハエの中では比較的大きなグループである。

大昔のことになるが学生のころ、このヤドリバエの分類を志したことがある。

卒業論文は、札幌近郊の豊平峡（現在では大きなダムができて昔の面影はない。）のイラクサに群れをなしていたクジャクチョウの幼虫に寄生するヤドリバエの観察結果である。イラクサの群落近くにテントを張ってヤドリバエが産卵する様子を何日も観察し、写真に撮った。この時のクジャクチョウのヤドリバエ相については、報告文になった。埋め草の短いものであったが自分の仕事が活字になった最初のものであった。

その後も学生を続け、夏はユースホステルに泊まりながらヤドリバエの採集に明け暮れ、北海道から奄美大島まで旅行した。冬は、顕微鏡でヤドリバエを見ているか、夏の旅行費用を蓄えるためアルバイトをしていた。

ヤドリバエの分類に関する小さな報告を二つ書き、新



シナヒラタヤドリバエ

種を3種類記載した。属の所属が変更になったものもあるが、3種ともシノニムと判定されることもなく今も生き残っているようだ。

やがて、学校にいつまでも残っていても食べていけないことに気づいた。雇ってくれる会社もなかったのも、背水の陣で公務員試験を受け、2回目の挑戦でようやく合格することができた。農水省での配属は行政で、ヤドリバエの分類を続けることは無理だと考え、それまで全国から採集した数十箱のヤドリバエの標本を大学に送った。

それ以来、数十年間、ヤドリバエとのつきあいはなかったが、50歳を過ぎてから老後の楽しみに再度ヤドリバエを採集し始めた。また、ヤドリバエの文献を集め直し、若いころ無理して買ったオリンパスの実体顕微鏡を引っ張り出してヤドリバエを見ている。どの属のものかわからないものもあるが、ようやく7割ぐらいの日本産ヤドリバエを種まで同定できるようになった。

接写レンズ付きのデジカメを購入し、ヤドリバエの写真撮り貯めて時々眺めている。ヤドリバエはどれもよく似ており地味なものが多く、写真で見ると実物以上に見栄えがしないが、できるだけハエらしくない見場の良いものを集めて、いまに「ヤドリバエ写真集」を自費出版しようと考えている。



フクラスズメ幼虫と *Drino bohemika*